

「令和6年度地域課題解決支援事業」成果報告書

市町村名 新城市

事業名 西部公民館を活用した子どもの居場所づくり～学びの支援と異世代交流～

1 経緯

西部公民館のある千郷地区には、千郷小学校・千郷中学校の小中1校ずつしかなく、ともに西部公民館に隣接しているため、安全に移動し利用するのにも都合の良い位置関係にある。

この立地条件を生かして、公民館を子どもの居場所にするための取り組みを行うことで、子どもの学びに貢献する役割を担うことができたらと考え、昨年度から地域学校協働活動に取り組み始めた。特に、主体的な考えをもって行動できる中学生に焦点を絞り、「中学生の居場所づくり～千郷中学校との連携～」をテーマとして進めてきたことを、本年度もさらに継続・発展させたいと考えた。

2 趣旨・目的

昨年度の課題としては、公民館を利用する中学生が増えた半面、学習環境を整えることが主な活動で、来館する時期も学習サポート週間に集中し、利用の機会も限定的だったことが挙げられる。

そこで、課題解決を図るために、本年度のテーマを「学習の場を提供する公民館から幅広い学びを支援する公民館への第一歩」とした。千郷中学校との連携を深めることで居場所づくりをさらに進め、それに加えて「学びを支援する講座の開設」にも取り組むこととした。中学生の知的好奇心に働きかけるとともに、幅広い学びのために必要な異世代交流を意識した活動を企画することで、子どもと地域をつなぐ役割を担う活動も目指したいと考えた。

3 手 段

(1) 学習の場を提供する方策

① 日常的な働きかけ

授業後や休日に利用していない空き部屋を使用料・予約なしで中学生に開放し、学びの場として提供する。時間については、平日は中学校の下校時刻から午後5時まで、休日は午前9時から午後4時までとする。

② 地域の人材を生かした学習サポート

1・2学期末テストのテスト週間に「学習サポート週間」を設定し、大学生や教員OBをサポートスタッフとして配置する。サポートスタッフの配置は、平日が下校時刻から午後5時まで、休日が午前9時から11時と、午後2時から4時まで配置する。

(2) 幅広い学びを支援する方策

① ミニ講座の開設

- ・ 下校時間が早い木曜日の授業後、午後3時30分頃から50分程度の時間で実施する講座。対象は、講座のテーマに関心のある中学生あるいは小学校高学年とする。

② 深堀講座の開設

- ・ 市内の中学生を対象としたプログラミング体験講座やキャリア教育（薬剤師、栄養士）を行う講座。
- ・ 薬剤師・栄養士を講師として、一般の方を対象に健康に関するテーマで実施する講座。
（※薬剤師・栄養士が講師の健康講座は、台風による悪天候のため実施できなかった）

4 概 要

学習サポートについては、期末テスト週間に実施できるよう「サポートスタッフの大学生、教員OBの手配」や「中学生への案内の作成・配布」を進めていった。

「ミニ講座」「深堀講座」は、中学生の興味関心や、講師の手配などを考慮して年間予定を立てたが、計画通りには進まなかった。本年度実施したのは、次の活動、講座である。

- ◇ 6月11日（火） 第1回学習サポート週間（～16日）
- ◇ 8月 6日（火） 深堀講座：プログラミング体験講座『DO PROGRAMMING!』
- ◇ 9月 5日（木） ミニ講座：作手・古宮城のVR体験
- ◇ 10月31日（木） ミニ講座：デジタル紙芝居『千郷物語』
- ◇ 11月 7日（木） 第2回学習サポート週間（～13日）

5 実施状況・プロセス

(1) 【学習サポート】第1回・第2回学習サポート週間

① 参加者・協力者のまとめ

<6月> 15日（土）は開放できる部屋がなかった ※ 参加生徒：のべ74名

日	11日	12日	13日	14日	16日
曜日	火	水	木	金	日
スタッフ	教員OB	大学生2名	教員OB	教員OB	大学生3名
生徒人数	2名	15名	18名	22名	17名

<11月> ※ 参加生徒：のべ87名

日	7日	8日	9日 （午前）	9日 （午後）	10日 （午後）	12日	13日
曜日	木	金	土	土	日	火	水
スタッフ	大学生 2名	なし	大学生 1名	大学生 1名	大学生 1名	大学生 1名	教員 OB
生徒人数	12名	20名	10名	13名	5名	11名	16名

② 振り返り

教え合う男子生徒、黙々と勉強する女子生徒。最初は、生徒だけで学習を進めることが多かった。しかし、大学生や教員OBからの声掛けで、生徒からも話しかけたり質問したりすることが増えた。

数学が苦手な生徒は、大学生から問題の解き方を教えてもらい、自分で解けるようになっていった。「家でも復習して問題が解けるようになった」とうれしそうに話していた。中3女子生徒は、「す

ごいよくわかる。来てよかった」と感想を話した。教えた大学生は塾で講師をしており、「質問された内容の所は、どこでつまづくのか、だいたいわかっている」と話し、生徒に寄り添う大学生の優れたサポートの姿を見ることができた。

6月中旬は就職活動や教育実習などで、平日午後3時以降に都合のつく大学生が少なかった。また、サポートスタッフの多くが4年生になったことも課題として挙げられる。次年度に向けて3年生以下の大学生で協力者を地域の方からも紹介していただく仕組みをつくるなど、新たな手だてを検討することが必要である。



(2) 【ミニ講座】作手・古宮城のVR（バーチャルリアリティ）体験

- ① ねらい VR体験を通して、新しい技術を身近に感じたり関心を高めたりするとともに、歴史的価値の高い古宮城を知ることによって新城の歴史にふれる。
- ② 講師 トヨタテクニカルディベロップメント株式会社 平野氏、西澤氏
- ③ 当日の様子

VR映像はアニメーションで2部構成。1部は城の入口から本丸まで登っていく内容で途中にある防御施設を足軽が説明するようになっている。2部は火縄銃の疑似体験。遠くから走ってくる敵を火縄銃で打つ内容となっている。

参加者は、全部で9名だった。コントローラーの操作方法を講師から聞いて始めたが、中学生は感覚が優れており、すぐに操作を覚えた様子だった。「全方向に景色があり、本当にリアルだった。音が耳のすぐ近くで聞こえるから、相手の話を間近かで聞いている感じがすごい。」「今までにない経験ができてよかった。VRというものが身近ではなかったけど、またやりたいと思った。」など、VR空間の中でスムーズに城歩きをしたり、火縄銃を撃ったりして、VRそのものを楽しみ、バーチャルな空間を体験して関心を高めることができた。また、VR映像内で、「風林火山の幟旗」がいくつも立っていることに気づき、なぜなのかという疑問から古宮城と武田とのつながりを理解した生徒がいた。気づきから問いを見つけ、理解を深めた生徒に感心した。



(3) 【ミニ講座】デジタル紙芝居『千郷物語』

- ① ねらい 「ちさと郷土研究会」と有志の中学生が協力し、児童クラブの小学生にデジタル紙芝居を披露する活動を通して、異世代交流できる場をつくる。
- ② 参加者 中学生：5名、小学生：11名、ちさと郷土研究会：6名
- ③ 当日の様子

〔デジタル紙芝居の内容や発表方法について〕

参加した小中学生は、2年前に小学校で同じ縦割り班だった子がいたこともあり、和やかな雰囲気の中で講座を始めることができた。最初に披露した『千郷物語』は千郷地区ができるまでの歴史をたどる内容で、小学生にはやや難しかったが、校歌の歌詞を扱うなど身近に感じさせる工夫がされ

ていた。次に発表した昔話『大洞山とかいくら湊の龍』では、話に出てくる池に行ったことがある小学生がいて、そこから龍が出てくる話に興味をもっていた。絵は研究会の方が描いたもので、リアルに描かれた龍には迫力があり、聞いている小学生たちが物語に入り込む映像になっていた。

参加した小学生は「新城の歴史もわかったし、こまかく説明してくれたところがわかりやすかったです」「新城の昔の話を聞いて昔のことがもっと知りたくなりました」などの感想を述べた。紙芝居を読んだ中学生は、「高齢の方から小



学生まで、幅広く交流できたよかったですと思います。私は小さな子が好きで、小学生の子たちが感想で言ってくれていたように素直に見たり聞いたりしてくれていてうれしかったです」と話してくれた。

小中学生と地域の方が公民館で、地域の歴史や昔話を題材として接点をもち、お互いの良さを再認識できる機会となった。なかなか異世代の人たちが集い、交流することが少なかったので、まずは第一歩を踏み出すことができたのではないかと考える。



(4) 【深堀講座】プログラミング講座『DO PROGRAMMING!』

- ① ねらい 教育用レゴに自動運転のプログラミングをして、動きの制御ができるようにするとともに、楽しみながら自動運転に関する技術や知識を学ぶ。
- ② 講師 トヨタテクニカルディベロップメント株式会社の関係者 5名
- ③ 参加者 新城市内の中学生20名
- ④ 当日の様子

〔活動内容〕

- ・ 教育用レゴ（ミニカー）に、「前に障害物があれば停止する」「サーキットコースを白線からはみ出さないように走る」という2つの動きを設定する。
- ・ 1グループ3人で、協働してプログラミングを検討・修正しながら目標を目指す。
- ・ 7グループが、それぞれプログラミングしたミニカーで隊列走行に挑戦する。

自動走行では、「白線に沿ってコースを周回すること」ができるためには、「カーブからはみ出さないように速さを調整すること」も必要である。それらの制御を数値に置き換えてミニカーに入力し、サーキットコースで走らせ、プログラミングの適格さをトライ＆チェックを繰り返しながら精度を高める作業を行った。その数値の最適解を相談する際、在籍校や男女の区別なくグループの3人がお互いに自分の考えを言葉で伝え合い、コミュニケーションよく課題解決に向かって協働できていた。

最後に、7台のミニカーで隊列走行に挑戦した。コース



の白線に沿って走りながら、前の車に近づくと止まり、離れると動き出すミニカーを見て、生徒たちはとてもうれしそうだった。自動運転の基礎となる仕組みを体験を通して学び、学んだことが形になって目の前で動いていることにわくわくする気持ちを感じている様子だった。

6 スタッフの感想

（生涯学習課職員）

デジタル紙芝居終了後、満足げな顔をして談笑している中学生と郷土研究会の方の顔は印象的だった。私自身は。講座の企画、調整、そして実施に結び付けていくことの難しさを痛感した。

（公民館職員）

中学生が参加したくなる講座や取り組み。そこには、自分自身を磨く活動、人や地域に貢献する活動、官民連携事業のように専門性の一端にふれる体験があり、これらが心を動かすキーワードになることを感じた。

7 成 果

(1) 学習の場を提供する取り組みについて

「学習サポート週間」は、2回とも70名を超える生徒が参加し、勉強場所として西部公民館を選ぶ生徒が定着したように感じた。そこには、分かりやすく教えてくれるサポートスタッフの存在が大きく、複数回利用することで親しくなったスタッフに恥ずかしがらずに質問できる関係ができたことが参加意欲を高める要因となっている。また、日常面では中学3年生を中心に、授業後、自習のために来館する生徒がおり、地域の方からは「ありがとうございます。遠くまで出かけてなくても近くで勉強できるように、ぜひ続けてください」と感謝の言葉をいただいている。

(2) 幅広い学びを支援する取り組みについて ～子どもと地域をつなぐ取り組みも含めて～

ミニ講座では、昔の紙芝居をスクリーンに映し出した映像に形を変えて、小学生・中学生・地域の郷土研究会会員の異世代交流の場を企画したところ、参加者全員にとって学びのある講座となった。小学生のために発表をがんばる中学生、少し緊張した表情で質問や感想を発表する小学生、そうした様子を温かく見守りながら小中学生をほめる地域の方々。公民館だからこそ実現した講座だったと考えている。



深堀講座「プログラミング体験」では、新城市内の中学生に「自動運転」という最先端技術に触れる講座を開催できた。行動制御を数値化し、先の見通しをもちながら試行錯誤を繰り返して最適解を見つける作業は、学校ではできない貴重な体験となった。最初は難しいと感じていた中学生たちだったが、途中からは目を輝かせながらコースでミニカーを走らせ一喜一憂する姿や、隊列走行を成功させ達成感にあふれた姿を見ることができ、主体的な学びの意義を強く感じた。



8 課 題

本年度テーマとした「幅広い学び」と「異世代交流」は、新城市の実情に合致した方向だと考えており、その第一歩を踏み出す1年となった。しかしながら、テーマに迫るための手だてにはさらに工夫が必要であることを強く感じている。

幅広い学びの支援のため、「ミニ講座」、「深堀講座」の企画をしたが、見通しの甘さが露呈した。年度当初、それぞれ4つの講座を企画したが、実現できたのは合計で3講座であった。台風の影響で実施できなくなった講座もあるが、一番大きな要因は、中学生が思うように集まらなかったことである。中学生が参加したくなる講座を開設できるかどうか、その企画力が最も重要であることに気づかされた。興味関心に加え、必要感なども考慮して、思いに寄り添った講座を考えたい。

異世代交流については、地域団体との連携を深め、中学生を含めた子どもたちをどう巻き込んでいくか、その仕掛けが大切だと考えている。地域団体からの声を聞くと、子どもたちと共に過ごし共に学ぶ場をつくりたいという気持ちは強い。それを可能にするため、行政の役割は「企画の提案」「場の提供」「周知方法の支援」であると考えている。

9 今後の展望

郷土研究会と小中学生が「紙芝居」を題材として交流できたことを知った地域の方から、「ぜひ自分も呼びかけて、一緒に活動したい」という人が現れ、1月から囲碁会に中学生が参加することとなった。西部公民館に居場所をもつ中学生や、その中学生と一緒に趣味を楽しむ方々。多世代をつなぐ公民館の役割が、これから増えてくることに期待したい。

また、元気な地域づくりの大きな柱となるのは、自分で考え判断する力、人のために行動する力をもつ中学生であると感じている。部活動のあり方が大きく変わり、中学生自身が自分の興味関心に沿って授業後の活動を選択する時代を迎えている。少子高齢化が今後さらに進む中で、中学生を始めとして子どもたちの元気を高齢者などに波及させ、地域の活性化を図ることの必要性は誰もが認めるところである。公民館が子どもたちの居場所の一つとなる取り組みを推し進め、子どもと地域が関わる場づくりに取り組み、多世代交流の機会を増やすことで、子どもと地域とを結ぶ役割を果たすことを目指していきたい。



10 職員としての取り組んだことによる学び・気づき

新城市の教育方針である共育の考え方（共に過ごし、共に学び、共に成長する）を、公民館活動でも実践していくことが大切であると強く感じている。幅広い年代を集めることができる公民館の活動を充実させるために、「企画力」と「ネットワークづくり」を高めていきたい。